
理系の人々

5757

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理系の人々

【Nコード】

N3872BA

【作者名】

5757

【あらすじ】

工業高校機械科に通う三谷みたにけい継は、夏休み前の終業式の日、銃のよ
うなもので撃たれる。
目を覚ますとそこは牢の中。
継はなんと異星にいた。

数学と物理しか勉強ができない高校生が奮闘するSFストーリー。

ちよつとタイトルに不満があります。
自分でつけといてなんだこれ…って思ってます。つーことでタイト
ル募集中(、・・・)

第1話 夏の始まり（前書き）

初投稿です。うまく書けてるか分かりませんが、誤字脱字などがあれば教えて欲しいです。

第1話 夏の始まり

7月21日。

「お前ら夏休みでハシヤぐのはいいけど、ちゃんとバレないようにしろよー？あと課題も一応やれよー？」担任の教師がこんなことを言っていた。

「それは教師としてどうかと思いまーす。」と女子生徒が笑いながら言っつ。

「細けえ事は気にすんなー！お前ら夏を楽しめよー！じゃあ号令！」

「起立。さようなら」

「「「さようならー！」「」」

号令が終わると共に、教室内がガヤガヤし始める。この後の予定やら夏休みの計画やらでみんな楽しそうだ。

「継ー！！この後どこ行く？あ、悟はどこがいい？」

話しかけてきたのは友人の義人だった。継と言うのは俺、三谷継の事だ。俺、悟、義人は中学からの親友である。

悟は「どこでもいい」と言っつと、帰る準備を始めた。

「あ、わりい。俺今日パス」と俺が返すと、義人は

「なん……だと……！？お前まさか予定があるってのか……！？
ハッ！？彼女ができたのか！？そうなのか！？くっソリア充め！
！顔面滅びろ！！」なんてことを言ってきた。

「滅びろ」ボソツと悟も眩く。

「いやいやいや違うから！！やめろお前ら、祈祷を始めるんじゃない
え！！呪いでもかける気か！？」

こんなだからコイツらもてないんじゃない？？と正直思ってしまう。人
のこと言えないけど。

「さつさと家に帰って部屋を片付けたいだけだつて。夜中に飼いだ
猫が紙を散らかしまくってたみたいでさ、朝見たらひでえ惨状だつた。
」と、事実を述べると、

「そうならそうと言えよ。お前を拷問にかけるところだつたじゃ
ないか。」っておい。

「サラツと怖いこと言っんじゃないやねえよ……。」呆れつつ言った。

「そういうことならまた今度な。メールすつから！！じゃあなー！
！」「またね」義人と悟が言う。

「おう。じゃあまたな。」と返し、教室を出た。

所変わって、建物が密集する通りに来ていた。
家に帰るにはここを通るのが最短ルートだが、アスファルトからの
熱でうだるような暑さだった。

「暑……………」

文句が自然と出た。涼みに店に入るにも、正直この汗の量で気が引
ける。ということ、路地裏で涼むことにした。

こういう時、日陰は日なたよりも4、5 気温が低い。逃げるよう
に路地裏に滑り込んだ。

今まで入ったことのない、やたらに入り組んだ路だった。しばらく
進むと、やたらと開けている10メートル四方くらいの場所に出た。

その時。

上から叩きつけるような風が吹いた。

「っ!？」 思わず目を閉じる。

吹き下ろしてくる風の中、なんとか目を開ける。上をみるとそこには、なにか透明なものが浮かんでいた。

はっきりとは見えないが、粉塵や砂ぼこりでそこに「何か」があるというのは分かった。

風は立っていられないほどに強くなり、再び目を閉じる。

機械音と共に風が弱くなった。立ち上がり目を開けると、そこには信じられない物があった。

銀色の 円盤。

一般的に「UFO」と呼ばれるようなそれが目の前の空間にあった。

プシュ、という音と共に、円盤の側面が開いた。

宇宙人らしき人影がゆっくりと出てくる。

(うっお!? 宇宙人襲来!? 地球侵略!? 人類滅亡!?) 継の頭
の中をあらゆる不吉な考えが巡る。

おずおずと宇宙人らしき人影の顔を見て、継は思った。

(あ。……………かわいい……………!!)

茶髪でショートカットの美少女がそこには居た。

少女が伸びをして、嬉しそうに呟いた。

「
やった。………やっと着いたあ………!!」

言葉を発すると同時に、腰の後ろ付近で何かが揺れる。

継はそれを見て思わず言った。

「…尻尾おおおおお!!…!!…???」

少女の尻尾は左右にゆっくりと動いていた。

声に驚いた少女が継の方を見る。

「ああああああっ！！見つかった！！！！？？」

叫ぶ少女が何かを取り出した。

（はっ！？なんだあれ、銃か！？）

銃のようなものを少女が両手で支え、継に向けている。

やめろ、
と言つ間もなく、
継の身体は光に包まれ、
意識を失つた。

第1話 夏の始まり（後書き）

今後不定期気味に投稿していく予定です。

第2話 牢の中(前書き)

続きの投稿方法がいまいち分かりません……orz

第2話 牢の中

目を覚ますと、周りを柵で囲まれていた。

と、いつか。

牢の中、だった。

「うあああああぁぁぁっ!?!」飛び起きながら叫んだ。

周りに人が居るらしく、ザワザワし始める。

…なんか…動物園の虎みたいな気分になってきた……。

ふと外に目をやり、集まる人々を見る。

…先ほどの少女と同様、皆さん尻尾が生えてらっしゃる…それと…
…耳も。

もう何がなんだか……意味が分からないよ!!

混乱しているところに低い声が響いた。

「
…起きたか…
…地球人…」

声^がする方を見ると、威^厳をオーラの^{ごとく}放^つおじいさんがいる。

足元から腹…顔へと視線^を移す…。

「ぶっふぉあ!？」 思わず嘔き出してしまった。

その理由は…彼の頭の上…。

ウサ耳 だった。

「…笑うな…!!」 険のある声で怒鳴られる。

「す…すいません…。今のは…不意打ちすぎっ…!!」 必死に笑いを堪えながら言う。

「…突然で悪いが、お前には死刑になってもらう。」

「……………は！！？」

何言ってんだろう、この人。

「え？え！？全然話が見えないんですけど！？ていうかまずここどこ！？なんで俺牢に入れられてんの！？死刑って何！？」軽いパニック状態で矢継ぎ早に質問する。

「……つるさい奴だ……まあいい。まずは一つ目の質問に答えてやる
う。」

「呼吸おいて、口を開く。」

「ここは地球ではない。銀河系の惑星、アグライア。あ、ちなみに
私はこの星の最高議長のネルだ。」

「え……地球じゃ……ないの……!?……じゃあ俺なんでここに居るの？」

「お前は……獣耳が無い少女に会ったか……？」

ハツとする。「あ…はい…会いました。尻尾はありましたね」

はあ、とネルが溜め息をつく。

「その少女が原因だ。…恐らく、銃のような物で撃たれただろう？
」

「あ…はい、そうですね。…でも…俺がここに居ると何の関係が？」
疑問に思ったことを投げかける。

「…それは物質転送装置なのだ。あれだ、俗に言う《ワープ》のた
めの道具だ。」

「えー!? ワープ!?」 なんですか。 某戦艦のあれですか。

「…動揺しておるな。 まあいい、この辺で、死刑の話に戻るか。」

.....あ.....死刑.....

第2話 牢の中(後書き)

死刑 (ミサ風に)

第3話 牢からの脱出？（前書き）

脱出というか…出してくれます。

第3話 牢からの脱出？

「死刑てなんなんすか」

「死刑は死刑だ」

「で、なんで死刑なんです？理解できません。頭沸いてんですか。」

「説明すつから黙って聞けやガキが…」

正直かなり怖いです。やめてください。

「すみませんした。説明キボン。」

ネルが話し始める。「…昔からのきまりでな。この星の法律でもある。《この惑星に外部からの訪問者あれば、打ち払うべし。侵入を許せし時は、その者の命絶たるべし。》という条文だ。ということとで法律に基づいて死刑に「断る」

言葉を被せると、ネルは怪訝な表情を浮かべる。

「今回の出来事は全部そつち側に責任があるだろ！？勝手にワープなんてさせられて、困ってるのはこつちだつての。大体俺は訪問もしてないし、打ち払われても無い。それにあんたらは、あんたら以外をワープできないようにしとくべきだったはずだ。そうだろ？それにあれだよ、何だっけ…チガイホーケン？とかいうのにも当てるまるだろうし、死刑なんてまっぴらごめんだ」

言いたいことは言い切った。正直チガイホーケンってなんだっけ、と思いつながらネルの返答を待つ。

「…確かに…そうだな。お前の言うことはもつともだ。だが、たとえば特例的にお前を生かしたとしてどうする気だ?? 一生をここで過ごすだけだぞ??」

疑問に思ったことを言ってみる。

「ワープの機械をもう一回使うのはダメなのか!??」

「物質転送装置は送信機と受信機が別々だ。ちなみに受信機は20トンくらいあるぞ?」

即答される。

「宇宙船は無いのか!??あの女の子は乗ってたじゃないか。」
再び質問。

「生憎、人が乗るように作ってはいけない法律があつてな、あれはあの子がこっそり作ったものだ」

また面倒な法律…。全然対外的じゃない…むしろ自分から交易だのを閉じているのだろうか。

「よし、分かった。」

このとき俺は決意した。

ら出してやってくれ。」

（そうだった…格好良く啖呵切ったけど俺牢屋で捕まってる身じゃん…！！迫力ねえなおい…！！）なんて思いつつ、牢からやっと出る。

「こちらへ来なさい三谷継。…大学選びにあたって聞きたいのだが…お前は物理や数学はできる方か…？」

ああ、宇宙船作るにはそっち系大事だよな、と思いつつ答える。

「得意ですよ？どっちも模試で一位とつたこともありますから。…

…まあ、それ以外は全く勉強できないんですけど。」

この2つは誇れる、と思う。

「ほう、そうか！！ならばお前には技巧特化大学工学科が良いだろう」

聞き慣れない言葉が出てきた…。

「その、技巧特化大学…ってなんなんですか！？…あと…俺まだ高校生なんです。」

「その辺りの説明は面倒くさいから省く。他の奴に聞け。」

え…こんな投げやりな…。担任と既視感を覚えた。

「あとは…住むところをどうするかだな…。」

ネルが思案していると、後ろの方から声が上がった。

「最高議長ネル様!!」

振り向くと、女性が立っていた。

「その子は私どもの家で預かろうと思うのですが。…なにしろ、娘の失態です。…」

「ミネルバ…だったか…？そうか。ではそうするがよい。」

なんか勝手に決まったらしいです。まあ、家事とかできないから一人暮らしは無理だったんだけど。

「そうと決まれば…行きましようか!!…えーと…三谷くん…?」
女性…ミネルバさんとやらに話しかけられる。

「あ…はい。」

短い返事をしたところでミネルバさんがついてこいという風に歩き出す。

黙って後ろについて歩いていく俺。

ミネルバさん、……猫耳でした。

5分ほど歩いた後、ミネルバさんが立ち止まる。

「ここがあなたが一緒に暮らす家よ!!…どうかしら!？」

目を輝かせて聞いてくる。

「すごく…大きいです……。」

増築しまくった感じの家だったが、ほとんどそんな違和感はない、
と思った。ペンキのいろが僅かに違ふところがあり、それで辛うじ
て増築が分かる程度。

「でしょう!？ま、立ち話も何だし、中に入りましょう。」

嬉しそうに話し、玄関を開けて入っていくミネルバさん。その後についで行く。

家に入って、思わず声を漏らした。

「…すっげえ……。」

アンティークらしい家具やステンドグラス何かがある。華やかであるが、華美ではないという感じの室内だった。こういう部屋は結構好きだ。

「あらゝありがとう。必死こいて何年もかけて集めた甲斐があったわゝ。あ、とりあえず座って?。」

椅子に座るように促され、座る。

「改めて自己紹介しますね。ミネルバ・クロト、ピチピチの40歳です。」

ピチピチの…？40歳…！！？

「あ、はい。俺は三谷継、正真正銘ピチピチの17歳です。」

「そんなにピチピチを強調しなくても良いと思うわよ？細かいこと気にしちゃモテないわよ？だからまだ童貞なのよ」

「…っ！！…っ、うるさい！！俺は30歳で魔法使いになんかならないからな！！」

あわてて反論した。

「あ、この家には後2人住んでるから。あとで挨拶しときなさいね？」

鮮やかなスルー。

「じゃあ、この星について説明していきこうと思っけど…また次話ね。」

「あ…？」

第3話 牢からの脱出？（後書き）

次話は設定紹介をミネルバさんがしてくれる感じになります。

第4話 惑星アグライアとは（前書き）

4話目です。ようやく慣れてきました。

第4話 惑星アグライアとは

「まずはこの星、アグライアの説明から始めるわね？」

無言でコクリと頷く俺。

「アグライアはあなたたちが住んでいる地球から大体…14光年離れた場所にある惑星なの。岩石で出来ているから、地球とあまり変わりはないと思っ…ていいわ。」

「へえ…ってあれ？14光年って割と近くないですか！？」

こっちから見つからないのは不自然な気がする。

「それは…確か、地球との間のどこかに…暗黒物質？とかそういう感じの物質が集まってるところがあるとかで、丁度どちらから見えないようになってるらしいわ。私はそんなに知識無いから…簡単にしか説明できないけどね。」

「なるほど…そういうことなんですか…ご都合主義な…。」

「え？」

「なんでもないっす。続けて下さい。」

話を進めてもらう。

「自転周期は24時間、公転周期は366日。えっと…直径は地球より少し小さかったはず。」

「これまたご都合主義。」

「ご都合主義でも無いのよ。きちんとした理由はあるから」

小声のつもりだったんだけど。聞かれてた。

「あ、暦は地球に合わせてるから、12月32日まであるんだけど」

「別で調整しろよっ!?!?」

「で、次ね。この星はひとつの大陸しかなくて、陸と海の割合は大体1:9くらい。それゆえに、戦争は一度も起こったことが無いのよ。まあ…犯罪は起きるけどね」

「海は広いな大きいな…ってレベルじゃないっすね…」

「星自体のことはこのくらいでいいわね?次、学校について。」

「ああ、気になってたところなんですよ。」

いきなり大学に入れとか言われたしな。

「この星では、小学校、中学校ときて、次は大学校なの。」

…え?それって…

「大学は高校と同じようなものってことですか!?!?」

「まあ…そんな所ね。あなたと同じくらいの年の子が通ってるから。」

「でしょう？本当にすごいんだから！」

えっへん、と胸を張る。

「いや、ミネルバさんが威張ることじゃ無いと思います」

そう言い終わったとき、玄関がガチャ、と開いた。

「ただいまーっ！！……って誰……！？」

小学生っぽい女の子が家に入ってきた。

第4話 惑星アグライアとは（後書き）

この少女の正体はいかに…!?!?
って、普通に娘ですけど。

第5話 幼J：家族との出会い（前書き）

5話目です。節々にネタを入れています。

第5話 幼J…家族との出会い

ミネルバさんから俺の事を聞いた猫耳で茶髪、ポニーテールの幼…
少女が話し始める。

「そう…。姉さんが…。悪いことしたわね。ごめんなさい。」ペこり
りと頭を下げてくる。

「ちょ、頭上げてくれ…。こっちが申し訳なくなる」慌てて顔を上げてもらう。

「あ、挨拶が遅れたね。私はケレス・クロト。この家の次女。これからよろしくね?」

少女が微笑む。

「俺は三谷継、17歳だ。こちらこそよろしくな」

俺も挨拶する。

その様子を見ていたミネルバさんがケレスに話しかけた。

「ケレス、あなたもちゃんと歳を言いなさい？」

なんか心なしかニヤニヤしている。

「あの……歳聞いて……《コポオWWW》とか《フォヌカポウWWW》
《とか言わない……でね？》」

「なんだそれ？言わねーよ」

なんなんだろうっ……？

「うっ……じゅ……歳……」

「え？」

10歳？

言いよんだケレスが再び口を開く。

「……もうすぐ……16歳。」

「……………」

どうみても12歳くらいの少女なんだけど

童顔、低身長、ツルペタ。

これを少女と言わずになんと言「ぐっふぁあー!?!」

腹を殴られた。

「哀れむような目で見るんじゃないわよ！…どうせ発育不十分でツルペタよ！…悪かったわね！！」
ケレスちゃん涙目。

「痛え…言っつてねえよんなこと。ていうか、そういう嗜好の奴にはウケが良いんじゃないのか？」
と、言っつてみる。

「ああ…。それが厄介なんだけどね…。」

「え？…どういう意味？」

「…なんでもない。じゃね。」

そついうと、ささつと階段を上がっていく。

「ふふふ」笑うミネルバさん。

「ミネルバさん…楽しまないで。」

はあ。疲れた…。

「あ、そうだ。家の中案内しないとね。建物探訪」

「いや、いい家ですねえ。このアンティークの家具、木のぬくもりを感じますね。…ってなにやらせるんですか!？」

思わずノリツッコミしてしまった。

「あら、ポケも割といけるわねえ。似てたわよ？」

「…話を元に戻しましょう。」

はあ…。

「そうね。じゃあついてきて？」

ミネルバさんが歩き出す。

「そっちが居間でこっちがトイレ。で、そこがキッチンでここはお風呂。…ケレスが入っても覗いちゃダメよ？」

にやにやすんな…。

「大丈夫です。俺ロリコンじゃないんで。」

「あらそう。…残念。」

残念…じゃねえよ!!! 心中で悪態をつく。

「庭にある離れは工場。お父さん…あ、旦那ね、鍛冶職人やってるのよ。なかなか腕はいいわよ？」

へえ、と声を漏らす。ガタイのいい洗面のおじさんを想像してしまう。

じゃ、2階ね、といってミネルバさんが階段を上がっていく。

「ええと…この階は物置みたいな部屋が多いわね。絵を置いたり、お父さんの作った物を一時保管したり。」

ん？

「絵…ですか？」

疑問に思ったので言ってみる。

「そう。私画家だから。これでも結構名は知れてるのよ？」

「なんか…意外な感じがします」

「そう？あ、ちなみに4階は私の仕事場だから。」

4階丸ごとか、と聞くとそうよ、と返ってくる。外から見てもかなり広がった気がするが。

「さて、案内再開しましょう。そこが長女の部屋。下着くらいなら盗ってくんかくんかしても構わ「しません」

言い終わる前に言葉を被せる。

「あ、その隣空き部屋だから今日から三谷くんの部屋ね。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

サラッと部屋を決められる。

「じゃ、3階ね。」

階段を上がり、ミネルバさんが再び話し始める。

「この階は私とお父さんの部屋、物置、ケレスの部屋があります。」

指を差しながら歩いていく。

ケレスの部屋の前で小声で話しかけてきた。

「ケレス、今着替えてるかもしれないから突入しましょうか？」

「はあ！？あつ、ちょ。」

「どーーーーん!!!!!!!!!!!!!!」

ミネルバさんが勢いよくドアを開ける。咄嗟に目をつぶった。

「ひえっ!?!?!?」

ケレスのビックリした声がする。

俺は紳士だ…絶対に目は開けんぞ…！！！！

そんな俺と裏腹にミネルバさんは

「なあんだ。もう着替え終わってたか、残念。」と落胆の声を洩らす。

目を開けるとさっきとは違う装いのケレスがいた。

「も、もう母さん！！あと10秒早かったらヤバかったわよ！？」と、ケレスが叫ぶ。

…危なかった…また殴られるところだった。

「今建物探訪中なのよ…：…あら、脱ぎたての服が落ちてるじゃない。三谷くん、くんかくんかしてもい「キヤアアアツ！？」」

ケレスが服に飛びつく。

「継ってまさか…そういう性…癖…なの…!?!?」

ケレスが「信じられない」というような目で見てくる。

「はあ……。違う。ミネルバさんがふざけて言ってるだけだよ。」

溜め息混じりに言った。

「ああ…なんだ…よかった…。」

ケレスは心底ほっとした様子だった。

その後俺はミネルバさんの旦那さん、バルさんに会いに工場に行った。

バルさんは…想像した通りのガタイのいい洗面のおじさんだった。

バルさんさんは俺が挨拶すると

「…そうか。息子が出来たつもりで接する。よろしく」

これまた渋い声で言った。

俺はその後、バルさんに手伝ってもらい、ベッドと机、椅子なんかを部屋に運び込んだ。

ベッドは存外、フカフカしていた。横になってぼうつとしていたら、いつの間にか眠っていた。

第6話 1日の終わり(前書き)

やっと1日経過。遅い気がします。

第6話 1日の終わり

「…………え、…………てって…………ってば…」

遠くの方から声が聞こえる。…これは…ケレスか……？

「…飯だよ、起きてってば…!!」

そう聞こえた。

やっと目が覚めてきた。そうだ、俺すっかり寝てたんだっけ。

起きようと思う。が、体が動かない。

ケレスが俺の上に跨っていた。

…なんて、誰かが得しそうなシチュエーションだと思ったか！？残念、違うよ！！

頭は起きているが体は寝ているという、金縛りとも呼ばれる状態だった。

「継！！ねえ…！！？……………」

声はやんで不審に思っていると、腹に衝撃が加わった。

「うげあぁっ！！？」

みぞおち…殴られた…。

しかし、その一撃のお陰で俺は完全に起きた。

「いって……もうちょい穩やかに起こせないのか……!?!」
文句を言ってみる。

「穩やかに起こそうとしたわよ!?!5分も起こし続けたのに起きないから悪いのよ……!」

「そっか、ごめん……ありがとな」
と言ふと、

「先に下行ってるから……!」
と言つて部屋を出て行つた。

ぐっと伸びをして起き上がり、1階に向かつた。

下に降りていくと、夕食の準備が出来ていた。

「あつ、すいません……手伝いもせず……!」

全く手伝っていない事が申し訳なく、謝罪する。

「いいのよ。疲れて寝てたんでしょう？それに、今日の夕食はあなたの歓迎会みたいなものだから。」

ミネルバさんがそう言ってくれた。

どつりで豪勢な訳だ…。

「明日から手伝ってね、継？」

ケレスがそう言って微笑む。

わかった、と言いつつ、空いている席に座る。

「…すげ…」

料理を間近で見て呟いた。

「腕によりをかけて作りました。すごいでしょ！？お父さんなんか、普段手伝わないくせに今日は張り切って手伝ってたんだから」

ミネルバさんにそう言われて顔をしかめるバルさん。

全員に飲み物が行き渡り、クロト家3人がコップを持ち上げたので、遅れて持ち上げる。

ミネルバさんが俺の方を見て言った。

「ようこそ我が家へ。カンパイ!!」

チン、とコップを鳴らして、楽しい夕食が始まった。

30分後。

これでもかと言うほどに夕食を胃に詰め込み、苦しくなってソファに鎮座した。

「あ、お風呂入れたから入っちゃって〜。」
と声を掛けられる。

「はい。あ…でも俺服が…」

持ってきている物といえば学校用の鞆、ケータイ、財布くらいだった。服なんてあるはずがない。

「大丈夫、買ってきてあるから。あ、明日から補助金が下りるから
今後は自分で買うように。補助金は、明日ケレスに銀行まで案内し
てもらってね?」

何気にきちっとしているミネルバさんだった。

「ありがとうございます。それじゃお先に頂きます。」

と言い、服の入った袋を取って風呂に向かった。

後ろから、どうぞおいしく召し上がれ、なんて聞こえてきたけどあ
えてつつこまない。

風呂に入り終わって、自室でくつろいでいた。浴槽がの広さが、某国民的の海産物家族のそれに匹敵するほどだったため、この家族かなり裕福なんじゃ、なんてことを考えていた。

不意に、コンコン、と部屋の入り口をノックする音がした。

はい？というど、ケレスの声でした。

「ちょっと話聞きたいんだけど……いいかな……？」

いいとも！と、あのノリで言うと、ケレスが部屋に入ってきた。

風呂上がりらしく、まだしっとり濡れている髪は下ろされ、頬がピンク色に染まっていた。

ケレスはベッドにぼふ、と乗ると俺に向かい合うように座った。

「…………ケレス、ひとつ言ってもいいか??」

「ん、何？」

不思議そうな顔でこちらを見てくるケレス。

「俺がロリコンだったら、お前は俺に襲われてただろうな。」

「へっ!？」

ケレスの今の恰好。上はかなりの薄着、下はホットパンツのような服を着ていた。色気はないが、なんとなくエロい。

「ただでさえお前ロリコンホイホイなのに…そんな恰好してたらいいエサだろ。」

「ホイホイ言うな!!…ていうかあたしロリじゃないしね!？」

弁明するケレス。

「いや、その恰好をロリコンが見たら《ケレスちゃんマジ天使ww
wロリコンで良かったー！！》《ぐらいのことは言うだろうな。」

「あーもう！！ロリじゃないってば！！それより話聞きたいんだけどー？」

ちよつとからかったら怒鳴られた。

「あ…ああ…、…で？何を聞きたいって？」

「その…ね、…姉さんに会ったでしょ…？大丈夫だった？怪我とかしてなかった！？」

ああ、そういうことか、と納得する。

「心配…なのか？」

答えは分かりきっているが一応聞いてみる。

「…うん。勝手に宇宙船なんて作って…勝手に地球に行っちゃうんだもん。そりゃあ心配するよ。」

「…そうか。…あんまりじっくり見たわけじゃないけど、怪我とかは無かったと思う。」

「ホント！？…よかった…。」

ケレスが嬉しげると、猫耳も嬉しそうに動く。

無意識にそれに触ってしまった。

「っひゃん！？」

ケレスがくすぐったそうに声を上げた。

みるみるうちに、その顔は赤くなっていった。

「会ったその日に即お触り！！？何様のつもりなの！！？継のバカ！！アホ！！童貞！！」

最後のは余計だ、と言う暇もなく、叫びながら部屋を出て行った。

気が抜けて、急に眠さが襲ってきた。

ベッドに倒れ込む。

明日謝るか、と思いつつ深い眠りに落ちていった。

第6話 1日の終わり（後書き）

自分も眠くなってきました…。

第7話 変態未満 変態異常(前書き)

銀行とか。

第7話 変態未満 変態異常

7月22日。

「お・は・よ・う……!!」

ドスウツ……!!

「うぐあぁっ……!!」

全く起きてもない俺の腹に肘鉄を食らわせるケレス。

「ああ……俺また手間掛けさせた……?」

痛い腹を抑えつつ質問してみる。

「いや?気持ちよさそうに寝てたのがイラッとしたからだけど?」

「……」
沈黙。

「……」

沈黙。

「昨日のあれ…まだ怒ってる？」

「当然！！あんないきなり…頭の中『何コイツ！？』ってハテナばかりよ！？」

うわぁ。大分嫌われたっばいな。……自業自得だけど。

「……なんか無意識に手が伸びた。悪気は無かった。今は反省している。」

「……なに万引き犯の供述みたいな事言ってるのよ！！ていうか、女の子の耳に無意識に手が伸びるって…あんた重度の変態なわけ？」

「…その耳って猫耳で合ってるだろ？なら俺は変態じゃない。」

「猫だけど…だから何だって言うの??？」

「俺は重度の『変態』じゃあない、重度の猫好きだ！……！！……！！」

「……………は？」

「昨日の朝もな、イタズラした家の猫に顔面擦り付けてモフモフしてきたくらいだ。俺得。超俺得。」

「はぁ……………そう。」

ケレスさん、なんか呆れてます？

「だから、ケレスの耳を触ったのは反射的なものなんだ！俺は猫が大好きなだけだッ！！！！」

俺がそう叫んだ時に、丁度ミネルバさんが部屋へ飛び込んできた。

「それって私とケレスが好きってこと」「ちげえ」

投げやりにつっこむと、一気に熱が冷めた。

「朝ご飯できるから、早めに下に降りてきてね？」
そう言ってミネルバさんが部屋から出ていく。

行くか、と言うと、うん、と言ってケレスが後ろについてくる。

朝食後、ケレスは銀行に行くために着替えてくる、と言って2階に上がって行ったので、皿洗いを手伝いながらミネルバさんと話をしていた。

「今って夏ですよね？なんかあんまり暑くないような気がするんですが」

「そうよ、夏。この辺りは気温の起伏がそれほどないわね。」

「へえ、過ごしやすくって良いですね。」

「でしょ〜？あ、そっちの布巾取って？」

「あ、どうぞ。この辺りには昔から住んでるんですか？」

「私はもつと北の地方に住んでたんだけど、結婚を機にこっちにお父さんは元から住んでるの。」

そんな話をしていると、トントン、と肩の後ろの方を叩かれる。

「準備できたから、行く？」

ワンピース姿のケレスがいた。ワンピースのせいでさらに幼く見える気がした。

「ああ、そうだな、幼女。」

ガスト、と脚を蹴られた。

「幼女じゃない！！！！」

「いって…ああ、すまん、無意識について」

「無意識ってのも問題あるからね!?!」

「こいつの前では言動に注意しよう」。

食器を洗い終えて、ミネルバさんに行つてきます、と言つて、

「あなた…生きて、帰ってきて下さいね…?」

「外は戦場なのかよ!?!」

「《あなた》の部分にも触れなさいよ!」

ミネルバさんにツッコミを入れたらケレスにツッコまれた。

所変わって、様々な店が立ち並ぶ通りに来ていた。

辺りには食べ物の良い匂いが漂っている。

「おう、地球人の兄ちゃんじゃねえか!!今ならこの服が1980
円!!買ってくか!?!」

声を掛けられる。帰りに寄ります、と言ってその場を過ぎる。

「通貨、円なんだ?」

と、ケレスに言ってみる。

「そうよ。この星の人は日本語しか喋らないしね。」

驚愕。

「着いたわよ、銀行。」

日本銀行のような建物だった。

中に入り、ケレスに案内されて窓口まで行く。

「三谷継への補助金を下ろしたいのですが」

と、ケレスが係員に話しかける。

「え、あ、ああはい…えっと…そちらのATMで顔認証の後、声紋認証をお願いします。」

俺の名を聞いて何故か狼狽する係員。

ATMで顔認証、声紋認証をすませ、しばし待つ。いつの間にか顔も声もしっかり記録されていて驚いた。

だが、入金額を見て更に驚いた。

0が…8…個…！？頭の数字は5だ。

「どれどれ？いくら入ってるかな？」

ケレスが横から覗いてきて、その顔を強ばらせた。

「…最高議長太っ腹すぎでしょ…」

「…そういう問題じゃねえよ」

とりあえず10万ほど下ろしてみた。札に諭吉の姿は見当たらない。

銀行を出て、さっきの店で服を買う。ケレスが一着の服をずっと眺めていたので、買ったら上機嫌になった。

その店を出ると、

「あ、そーだ！あたし行き着けのカフェに行かない!？」

と、ケレスが言ってきたのでそれに応じる事にした。

カフェに入ると、店主らしき中年男性がケレスに声をかける。

「いらっしやいケレスちゃん、お！彼氏かい!？」

はい違います。

「ち、違うよ!!ほら、地球から来た三谷継だよ!」

さらっと紹介された…。

俺がぺこりと頭を下げる。

「ああ、君がそうなのか!!ゆっくりしていつてくれ!!」

俺たちが席に座ろうとしたとき、カフェの入り口が勢いよく開いた
!!

金髪のイケメンが息を切らして入ってきた。そいつは店内を見回し、
ケレスを見つけるなりこう言った。

「コポオWWWケレスちゃん今日もマジ天使！！フォオカポウWWWケレス、俺と結婚してくれーっ！！！！！！！！」

そいつは某ライダーのショッカーさながらにケレスに飛びつこうとした。

しかしケレスはそれに素早く対応する。

「アッパーからのワンツージャブ、そして右ストレートを…振り抜いたーッ！！！」

思わず解説してしまった。

ケレスに殴られ、倒れているこいつが誰なのがは知らないが、ひとつだけ分かった事がある。

こいつは確実に変態だ。

第7話 変態未満 変態異常（後書き）

残念過ぎるイケメン、という位置づけにしようかと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3872ba/>

理系の人々

2012年1月14日02時51分発行